



# 自閉症スペクトラム幼児の「母親支援プログラム」の開発と効果

著者	水内 豊和
号	8
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教情博第42号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00126287">http://hdl.handle.net/10097/00126287</a>

水 内 豊 和

准教授 佐藤 克美

教情 1

ローチこそ診断告知直後の時期に必要である。Xさん支援において必要なことは、女性としてのライフサイクルの様々な分岐点を歩んできた上での今の自分（一人の女性、職業人／専業主婦、A子ちゃんママとして等）を、性格やストレス、ストレスコーピングなどから客観的に自己認知できる情報提示などにに基づき再定位し、適切なアドバイスの提供とともにアイデンティティの再確立を支援することにほかならない。このように、自閉症スペクトラムのある子どもの家族支援においては、特に幼児期、とりわけ保護者、特に母親の個人的特性を考慮したていねいな支援が求められること、そのための母親支援プログラムの開発の必要性を問題の所在と本研究の目的として示した（1・2章）。

次に3章では、質問紙調査研究により、自閉症スペクトラム幼児を持つ母親が、健常児やダウン症などの他の障害のある幼児を持つ母親に比して育児ストレスが高いこと、またソーシャルサポートの活用も十分ではない母親の心理的危機の様相と要支援度の高さを浮き彫りにした。

4章では、1・2章の問題と、3章の調査研究での知見を受けて、子どもの発達への気がかりから診断が確定し障害告知を受けた母親を対象とした、集団式の子育てプログラムである独自の「母親支援プログラム」を開発した。これは、育児ストレスやストレスコーピング、そして女性自身の「個としての自分」と「母親としての自分」の葛藤から統合までのアイデンティティ変容の過程に着目した心理教育プログラムである。

5・6・7章では、3回にわたり「母親支援プログラム」の有効性について実証的に検討した。その結果、本プログラムの内容が従来の「母親としての自分」支援内容（ペアレント・トレーニングの内容）だけでなく、「個としての自分」支援内容を重視した包括的なプログラムであったことで、育児ストレスの軽減、ストレスコーピングの向上、そして女性のアイデンティティの再構築において有効に寄与したことに加え、実際に子どもの行動問題の改善や発達指数の伸長にも効果的であったことが示された。

8章では、この子育てプログラム実践の有効性の検証を通して、自閉症スペクトラム幼児を持つ母親に対する、効果的な支援のあり方について考察した。また9章では本研究の限界と課題について述べた。従来の自閉症スペクトラム幼児の養育技術の習得に特化したペアレント・トレーニングは、家族に支援者としての役割を遂行することを強く求められる。しかし母親にとってそれは時には大きな負担となるであろう。したがってこの時期、保育所・幼稚園、保健センター、療育施設、医療機関など、子どもとその家族に携わる支援者は、子どもに支援を行う家族もまた、支援を必要とする存在であるという意識をもつことが重要であると考えられる。その上で、本プログラムの内容が単に「母親としての自分」支援内容（従来のペアレント・トレーニングの内容）だけでなく、「個としての自分」支援内容を加味した包括的な「母親支援プログラム」であったことは、妥当であり有効な支援であったといえよう。

## ＜ 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 ＞

発達障害については社会的認知の高まりもあり、早期からの発見とその支援についての施

策も進みつつある。しかし、発達障害児の保護者に対する支援はそれに比して進んではいない。とりわけ母親については、一人の女性としてのアイデンティティの揺らぎの渦中であるにも関わらず発達障害児の母親であることが専門家から暗黙的に役割期待を課せられていることへの、心理的支援がわが国ではほとんど検討されていない。そこで本研究では、発達障害、とりわけ自閉症スペクトラムのある子どもを持つ母親の個人的特性を考慮したていねいな支援の必要性を鑑み、そのための母親支援プログラムの開発し、その有効性について検討したものである。

本研究は大きく次の3点について評価できる。

1点目は、障害児の親としての家族の視点ではなく、従来重要視されてこなかった一人の女性としてのアイデンティティの危機に対してアプローチしたプログラムを開発したことであり、かつその有効性を示したところである。発達障害児への対処技法を親が習得するペアレント・トレーニングとは別に、個としての女性支援の内容を盛り込むことで、このプログラムに参加した母親は全員が、個人としての自己と母親としての自己との間の葛藤から統合のプロセスを円滑に進めることができることを明らかにした。

2点目は、母親支援プログラムの効果検証について、母親の子どもへの対処スキルの向上や養育ストレスの軽減といった母親側面だけに着目しているのではなく、実際に子どもの発達指数や行動問題の頻度・程度の変容に寄与したのかについても評価したところ、また保育士に対しても日々の保育園での生活にどのように変化があったのかという社会的評価をとっていることである。このような多角的な評価で、ペアレント・トレーニングを含めた従来の母親に対する育児指導のアプローチを実証的に示した研究は多くなく、これからの家族（母親）支援研究の実践モデルを提示したといえる。

3点目は、これまでのソーシャルサポート研究にはなかった、ソーシャルサポート源の一つとしてソーシャルネットワークサービス（SNS）を加えて、障害児の母親のソーシャルサポートの活用実態とその効果を検証している点である。教育情報学的観点からもオリジナリティの高く重要な知見をもたらした。

他方、いくつかの課題も指摘されている。1点目は家族支援という点から見た際に、重要な家族成員である父親へのアプローチも必要であろうということである。2点目はプログラム参加のハードルの高さである。母親が有職者である、開催地が遠いなどの物理的・環境的な問題だけでなく、参加することは自子の障害を認識しなければならないという心理的ジレンマを伴うため、参加を勧奨する際には、ていねいなカウンセリングや個別支援も並行して必要と考えられる。

しかしながら本論文は、自閉症スペクトラム幼児の「母親支援プログラム」の開発と効果を明らかにするとともに、母親支援の新しい方向性を示しており、論文のねらいはほぼ達成されていると判断され、博士論文としての水準を充足していると審査委員会では判断した。

よって、本論文は博士（教育情報学）の学位論文として合格と認める。